

ゲーテの革命文学

芳原政弘

序

これまでゲーテの書簡、年代記、自伝（戦争記録）、対話などに語られた発言にしたがって、「ゲーテのフランス革命に対する態度」について考察したが、みずから『適切な一語による著しい促進』（Bedeutende Fördernis durch ein einziges geistreiches Wort, 1823）のなかに、「……ここで考察された事柄（論者注：対象的詩作というゲーテの詩作法）と直接関連してくるのは、私の精神が多年にわたってフランス革命に向けられたことである。このあらゆる事件のなかでも、もっとも恐ろしい事件の原因と結果を究めて、それをなんとか詩的に克服しようとする際限のない努力は、ここから説明される。過ぎ去った多くの年月を振り返ってみると、この見極めがたい素材に執着していたために、私の詩作能力が長い間、ほとんど無駄使いされてしまったことがはっきりと分かる。

しかしあの印象は私の心にとても深く刻み込まれているので、私が依然として『私生の娘』の続編を書くことを考えており、個々の叙述に取りかかる勇氣はないにしても、この不思議な作品の構想をたえず頭のなかで練っていることは否定しない¹と述べているように、ゲーテはフランス革命という「見極めがたい素材」に対して、傑作『私生の娘』、『ヘルマンとドロテア』をはじめとして「詩的に克服しようとする際限のない努力」を試みたのである。

実際に彼の文学作品のなかに、フランス革命をテーマにしたものが数多くある。フランス革命を題材とするゲーテの作品は一般に「革命文学」と呼ばれているが、それには次の*印のようなものを挙げることができる。もちろんこのほかにも作中に革命について触れたものもいくつかあるが、これらを3つの時期（初期：彼が最初に革命を題材とする作

品を書いた1790年から1794年のシラーとの連帯成立や1795年のバーゼル条約締結までの時期。古典期：これ以後のいわゆるヴァイマル古典主義の約11年間。晩年期：どこからはじまるか確定できないが、一応1805年のシラーの死や1806年の神聖ローマ帝国瓦解以後の時期、あるいはゲーテ還暦の『親和力』（1809）成立後から、1832年の彼の死まで）の3つに分けて、ジャンル別に列挙すると、次の通りである。

初期（1790-1794）

- 詩——『ヴェネチアのエピグラム』（*Epigramme, Venedig* 1790）
喜劇——*『大コフタ』（*Der Groß-Cophta*, 1791）
*『市民将軍』（*Der Bürgergeneral*, 1793）
*『扇動された人々』（*Die Aufgeregten*, 1793）
散文作品—*『メガブラツォーンの息子たちの旅』（*Die Reise der Söhne Megaprazons*, 1792）
*『ライネケ狐』（*Reineke Fuchs*, 1793）

古典期（1795-1808）

- 物語——*『ドイツ避難民の歓談』（*Die Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten*, 1794-95）
『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』（*Wilhelm Meisters Lehrjahre*, 1794-1796）
叙事詩——『アキレーイス』（*Achilleis*, 1798-99）
*『ヘルマンとドロテア』（*Hermann und Dorothea*, 1796-97）
『バキスの予言』（*Weissagungen des Bakis*, 1798-1800）
詩——『ローマ悲歌』（*Römische Elegien*, 1794-95）
『風刺詩』（*Xenien*, 1796）
『四季』（*Vier Jahreszeiten*, 1800）など。
悲劇——*『オーバーキルヒの少女』（*Das Mädchen von Oberkirch*, 1795-96）
*『私生の娘』（*Die Natürliche Tochter*, 1799-1803）

晩年 (1809-1832)

自伝 (戦争記録) —— *『フランス出征記』 (*Campagne in Frankreich*, 1820-1822)

*『マインツ陣営』 (*Belagerung in Mainz*, 1820-1822)

ただし、この2作は1792年から93年におけるゲーテの戦争体験の回顧録である。

短編小説 —— 『ノヴェレ』 (*Novelle*, 1828)

劇 —— 『ファウスト』第2部 (*Faust. Zweiter Teil*, 1832), 特に「第2幕」 —— タレスとアナクサゴラスの論争 ——, 皇帝の場など。

格言集 —— 『箴言と省察』 (*Maximen und Reflexionen*) 1809年から1829までの格言をゲーテの没後にまとめたもの。

これらのなかで、重要な作品をほぼ製作年次順に考察することにする。

初期の革命文学

第1章 詩『ヴェネチアのエピグラム』

ゲーテの文学作品のなかで、フランス革命を題材にした最初の作品は、1790年に書かれた『ヴェネチアのエピグラム』 (*Epigramme. Venedig*) の50-58番である。ゲーテはイタリア滞在中のカール・アウグスト公の母堂アンナ・アマーリアを出迎えるために、彼の依頼で1790年3月13日に、イエーナからヴェネチアへ向かって旅出つ。彼女の到着が遅れてヴェネチアには3月31日から5月22日までほぼ2ヶ月間滞在したが、その折りにエピグラムの多くがつけられた。あとからまとめられたものは全部で103番あるが、このなかでフランス革命に触れた8つ (50-58番)²を次に引用する。

Willkür suchte doch nur jeder am Ende für sich.
Willst du viele befreien, so war es, vielen zu dienen!
Wie gefährlich das sei, willst du es wissen? Versuch's!

(大意)

自由の使徒はみんないつも私の気に入らなかった。
誰も最後には自分の勝手気ままを求めにすぎなかったからだ。
多数を解放しようと思うなら、あえて多数に奉仕するがよい。
それがどんなに危険なものか、知りたければ、やってみよ!

51

Könige wollen das Gute, die Demagnogen desgleichen,
Sagt man; doch irren sie sich: Menschen, ach! sind sie wie wir.
Nie gelingt es der Menge, für sich zu wollen, wir wissen's!
Doch wer versteht, für uns alle zu wollen, er zeig's.

(大意)

国王は善政を願い、扇動家も同じことを願うと、人はいう。
けれど、彼らとて誤りを犯す。ああ、彼らも私たちと同じ人間な
のだから。
ご存じの通り、大衆には自分に望むことは何一つできない。
けれど、もし私たち万人の望むことを分かる人がいるなら、それ
を見せてくれ!

52

Jeglichen Schwärmer schlägt mir ans Kreuz im dreißigsten Jahre;
Kennt er nur einmal die Welt, wird der Betrogne der Schelm.

(大意)

狂信の徒はすべて30歳にして十字架に架けよ！
欺かれた者がひとたび世間を知れば、悪党になる。

53

Frankreichs traurig Geschick, die Großen mögens bedenken;
Aber bedenken fürwahr sollen es Kleine noch mehr.
Großen gingen zu Grunde: wer aber beschützte die Menge
Gegen die Menge? Da war Menge der Menge Tyrann.

(大意)

フランスの悲しい運命、身分の高い人はとくと考えるがよい。
けれど、もっと考えねばならぬのは下層人だ。
身分の高い人は滅んだ。しかし、民衆を民衆から守るものは誰か？
かの地では、民衆が民衆の暴君となった。

54

Tolle Zeiten hab' ich erlebt, und hab nicht ermangelt,
Selbst auch töricht zu sein, wie es die Zeit mir gebot.

(大意)

私は間違いじみた時代を体験したものだ。時代の命ずるがままに、
自分も愚かなことに事欠かなかった。

55

Sage, tun wir nicht recht? Wir müssen den Pobel betrügen.
Sieh nur, wie ungeschickt, sieh nur, wie wild er sich zeigt!
Ungeschickt und wild sind alle rohen Betrugern;
Seid nur redlich, und so führt ihn zum Menschlichen an.

(大意)

言ってくれ、私たちの行いは正しくないのか？私たちは下層民を瞞
さねばならぬのだ。

見るがよい！下層民はなんと無様に、乱暴に振舞っていること
か？

粗野な連中は瞞されれば、みんな無様で、乱暴になるのだ。
誠実であれ、そうして彼らを人間性へと導きたまえ！

56

Fürsten prägen so oft auf kaum versilbertes Kupfer
Ihr bedeutendes Bild; lange betrügt sich das Volk.
Schwärmer prägen den Stempel des Geists auf Lügen und Unsinn;
Wenn der Proberstein fehlt, hält sie für redliches Gold.

(大意)

君侯はしばしば薄っぺらな銀メッキをした銅貨の上に、
意味ありげな肖像を刻んで、長い間民衆をたぶらかした。
狂信の徒は嘘とナンセンスの上に、精神の烙印を押しつけ、
試金石をもたぬ者は、それを純金だと思い込む。

57

Jene Menschen sind toll, so sagt ihr von heftigen Sprechern,
Die wir in Frankreich laut hören auf Straßen und Markt.
Mir auch scheinen sie toll; doch redet ein Toller in Freiheit
Weise Sprüche, wenn ach! Weisheit im Sklaven verstummt.

(大意)

フランスの通りや広場で、声高かに絶叫する激烈な演説家について、
あの人たちは気違いだと、人はいう。

私もそう思う。けれど、ああ！隷属のなかで英知が沈黙するとき、自由のなかでは、狂った者でも賢明な箴言を吐く。

58

Lange haben die Großen der Franzen Sprache gesprochen.

Halb nur geachtet den Mann, dem sie vom Munde nicht floß.

Nun lallt alles Volk entzückt die Sprache der Franken.

Zürnet Mächtige nicht! was ihr verlangt, geschieht.

(大意)

長い間、身分の高い人たちはフランスの言葉を話し、

それを流暢に話せぬ者を半ば軽蔑した。

今や民衆という民衆が、有頂天になって、フランス語の片言を話している。

権力者よ、怒ってはならぬ！あなた方の要求したことが起きているのだ。

(論者注 フランス語の片言とは「自由」„liberté“,「平等」„égalité“など.)

これがフランス革命に対するゲーテのもっとも早い段階における文学作品のなかでの反応である。すでに述べたクロプシュトックの熱烈な革命賛美とはまったく異なり、全体を貫いているのは、革命に対する不快、嘲笑、皮肉であり、革命をけっして好意的に受けとめているとはいえない。むしろ混乱とみて、消極的な、拒否的な態度をとっている。

革命家とその同調者である「自由の使徒」は、なりよりも「狂信の徒」であり、「扇動家」である。その実体は「嘘とナンセンス」、エゴイズム、アナキー、圧制にほかならない。他方、「身分のお高い人」、「君侯」、「権力者」に対する批判も厳しい。このエピグラム55番で、瞞すのは権力者であり、瞞されるのは下層民であるといい、56番で君侯は銀メッキの銅貨に肖像画を彫って、民衆をたぶらかしてきたといい、57番

では封建社会の隷属のなかで、英知が沈黙するとき、自由のなかでは、狂信の徒でも賢明な箴言を吐くと、封建絶対主義の民衆の隷属的状况よりも、革命の主張する自由の状況を明らかに肯定している。これらは権力者階級に対する批判であり、ゲーテがけっして社会の支配階級、貴族階級に組しているわけではないことは明らかである。革命の初期の段階では、ゲーテは権力者にも革命家にも、ともに厳しい批判を向けていることに注目されるのである。

さらに、同じ時期につくられた、次のような詩もある。

Frankreich hat uns ein Beispiel gegeben, nicht daß wir es
wünschten
Nachzuahmen, allein merkt, und beherzige es wohl.³

(大意)

フランスは私たちが模倣することを望まぬ一例を示した。
よく気をつけて、肝に命ずるがよい！

ここにゲーテが自国ドイツに立場を置いて、フランス革命を見て、その模倣は望まない一例だといいきっている。すでに述べたように、ゲーテの革命把握は後進国ドイツの実情を眺めた上で、革命は自国に混乱を招くと判断したと考えられるが、この立場は最初からのものであることがここからもうかがわれるのである。

そのほかにも『ヴェネチアのエピグラム』の14・15・16番⁴に、政治について歌ったこんな詩がある。

14

Diesen Amboß vergleiche ich das Land, den Hammer dem
Herrscher, und dem Volke das Blech, das in der Mitte sich
krümmt.
Wehe dem armen Blech! wenn nur willkürliche Schläge

Ungewiß treffen, und nie fertig der Kessel erscheint.

(大意)

国を鉄床に，ハンマーを支配者に，
真ん中で打ち曲げられる鉄板を民衆に喩えよう。
勝手気ままなハンマー打ちがうまく当らず，
釜ができあがらなければ，鉄板こそ大迷惑だ！

15

Schüler macht mich der Schwärmer genug, und rühret die Menge,
Wenn der vernünftige Mann einzelne Liebende zählt.
Wundertätige Bilder sind meist nur schlechte Gemälde:
Werke des Geistes und den, der sich auf unsern versteht.

(大意)

狂信の徒は信奉者を多く集め，大衆を扇動するが，
分別ある人は，個々の人たちが愛するだけだ。
奇跡を起こす画像は，たいてい拙い絵にすぎぬ。
精神と芸術の作品は，俗衆のためにあるのではない。

16

Herrscher möge der sein, der seinen Vorteil versteht;
Doch wir wählten uns den, der sich auf unsern versteht.

(大意)

自分の利益を分かるものは，支配者になるがよい。
しかし私たちは，私たちの利益を分かる人を選ぼう。

以上のエピグラムから分かるように，ゲーテは多くのドイツ知識人の

ように、フランス革命を「誕生権」に立脚する封建絶対主義社会を倒して、これに代わる「自然権」,「基本的人権」に立脚し,「自由, 平等, 友愛」を標榜するの新しい民主々義社会の開幕としてみるのではなく, はじめは社会に混乱・動揺を引き起こす一大騒乱とみたということが出来る。

第2章 『大コフタ』

— アンシャン・レジーム末期の世界 —

『ヴェネチアのエピグラム』(1790)の若干の詩に続く, ゲーテのフランス革命をテーマとする文学作品は, 「革命喜劇」といわれる3編のドラマで, その第1作が5幕物の『大コフタ』(Der Groß-Cophta)である。この作品は革命勃発4年前の1785年に起こった, いわゆる「首飾り事件」(Halsbandaffäre)を題材にしたもので, これについてはすでに詳述したが, 簡単に要約すると, 次の通りである。

これはフランス王妃マリー・アントワネットを巻き込んだ一大詐欺事件で, このスキャンダルは18世紀フランスのアンシャン・レジーム末期のもっとも重要な政治的事件の1つとなり, オランダ, ドイツ, スイスなどの多くの新聞や本に掲載され, ヨーロッパ各地に大きな反響を呼んで, フランス王家の権威をひどく失墜させたのであった。

巧みな女詐欺師モッテ伯爵夫人(本名: Jeanne de St. Remy Valouis, 1756-1791)は1784年8月に, フランス王家の血筋(アンリー2世の私生児)という自称モッテ伯爵(Graf de La Motte)と結婚したが, 彼女の以前からの知り合いである, スラスプールの品行のよくない, 浪費癖のある領主司教で, 枢機卿のロラン(Louis-Renè de Rohan, 1725-1791)を相手に, この枢機卿が以前に失ったフランス宮廷の信用を回復し, 政治的影響を取り戻したいと望んでいるのを利用し, 自分は王妃と懇意な間柄であるとうまく信じ込ませ, 1784年8月に若い俳優で, 売春婦(Marie-Nidole LeGuay d'Oliva, 1761-1789)を使って, 売りに出していた1900,000ルーブルという恐ろしく高価なダイヤモンドの首飾りを, 王妃が欲しがっており, 枢機卿が買手になることを望んでいると偽り, 1785

年2月はじめに彼にその首飾りの売買契約を結ばせ、彼は宝石商に王妃が期日に代金を支払うからといって、それを受けとり、王妃に渡すように、侯爵夫人に預けた。彼女はそれをばらして、ダンヤモンドの1部をフランスで売却し、夫を通じてイギリスでも売却された。しかし、首飾りの売り主の宝石商が代金を受けるため、支払期日の1785年8月に宮廷に赴いたときに、はじめて事件は発覚し、関与者は逮捕され、バステューユ獄に送られた。長い裁判のあと、王妃もロアン枢機卿も若い女優も、だまされたことが分かり、放免されたが、モッテ伯爵夫妻は公開の場での鞭打ちの刑と終身刑に処せられた。

ところで、当時カリオストロ (Cagliostro) というイタリアの有名な冒険家・詐欺師——本名ギウゼッペ・バルザーモ (Giuseppe Balsamo, 1743-95)——がいたが、この人物もこの事件に巻き込まれた。彼はカリオストロ伯爵と自称し、啓蒙主義時代の最中にまやかしの奇跡治療や透視術、招霊術、神秘の教義の仲介者として人々から敬われ、ヨーロッパ全土にセンセーションを巻き起こした。夫人とともに、ヨーロッパ各地を旅し、ミータウ、ペテルブルク、ワルシャワ、フランクフルト・アム・マインを経由して、1780年にストラスブルにやってきた。そこで力と名声の頂点をきわめ、彼と彼の上演を見るために多くの訪問者が遠くからも訪れたが、ゲーテの友人で、チューリヒの牧師・作家のラーヴァーターもその1人であった。またこの地で、カリオストロは枢機卿ロアンの信頼を得、モッテ伯爵夫妻とも繋がりをもった。そこでこの事件に巻き込まれたのである。しかし事件への直接の関与は証明されなかった。彼はまたフリーメーソンのサークルに出入りして自分でもロッジを設立したり、改革したりした。そこでは例外的に女性も入れられた。彼はストラスブルからロンドンへ行き、そこで古いエジプトのロッジを革新し、「大コフタ」の教説を伝えようとした。パリに赴いたときには、多くの信者を集めていた。しかし最後に彼はローマの宗教裁判の法廷で、詐欺師の仮面を剥がれ、死刑の宣告を受けた。1791に終身刑に減刑されたが、4年後にこの世を去った。

ゲーテはこの「首飾り事件」が起こる数年前に、すでにこのカリオストロ伯爵を胡散臭い人物と睨んで、ラーヴァーター宛書簡 (1781年6月

22日付)のなかに、次のように書いている。ラーヴァーターはカリオストロ信奉者の1人であった。

「カリオストロの秘術に関しては、私はあらゆる風評、特にミータウからのものには非常に懐疑的です。闇のなかを忍び歩く多量の虚偽については、情報とまで言えませんが、その手がかりは掴んでいます。このことはあなたもご存じないようです。どうか私を信じて下さい。私たちの道徳的および政治的世界は、大都会でよく見られるように、地下の通路や穴蔵や下水溝で掘り巡らされているのです。それらの連絡やそこに住む人たちの状況については、誰も考えたり、思案したりはしません。ただひとたび地下が陥落し、あちらの奈落から煙が立ち上り、こちらから不気味な声がかきこえてはじめて、ある程度消息に通じている人にとって理解できるのです。」¹

この書簡で分かることは、ゲーテがこの人物の「秘術」、つまり魔術、心霊術、招霊術などをみて、このような非学問的、反啓蒙的、オカルト的、神秘主義的な迷信の所業を容易に受け入れる風潮がフランス18世紀のンシャン・レジームの貴族社会に深くはびこり、これを浸食している様子を冷静に把握していることである。アルヴィーン・ビンダーの指摘するように、「ここで特に注目に値するのは、ゲーテが——すでに『首飾り事件』の数年前に——『多量の虚偽』を道徳的世界ばかりでなく、政治的世界とも関連づけていることである。それゆえ、カリオストロは彼にとってすでに当時の社会的事象を明確に示す1つの現象であった」²ということが出来る。

そして1785年に実際に「首飾り事件」が起こったとき、彼はその経過と政治的影響に異常な関心をいただき、そこに大きな社会的、政治的危機を予感したのである。すなわち、後年の記述ではあるが、『年代記』のなかの1789年の項に、次のように書いている。「すでに1785年に例の首飾り事件が私に名状しがたい印象を与えた。ここに暴露された都市、宮廷、国家の不道徳の深淵のなかに、この上もなく恐ろしい結果」が予感され、友人たちには「当時彼が気でも狂ったのかと告白するほどであった」と述べたあと、続けて「シチリア島でカリオストロとその一家の情報を手に入れようと苦心し、最後にはいつものように、あらゆる観察に

締めくくりをつけるために、全事件を『大コフタ』のタイトルで歌劇化したのであった。題材が劇よりもオペラに適していたからだろう」³と述べている。また『フランス出征記』のなかにも、「この（事件）の訴訟によって引き起こされた衝撃は、国家の基礎を揺るがせ、王妃と上流階級全体に対する人々の尊敬をぶち壊した。というのも、噂にのぼる事柄はどれもこれも、遺憾ながら、宮廷と貴族が陥っている恐るべき墮落を露呈するものばかりだったからである」⁴と述べている。つまりゲーテはカリオストロのような魔術師・詐欺師の存在や首飾り事件の発生に、「アンシャン・レジームの道徳的、政治的墮落の決定的な兆候」⁵を読みとったのである。

このイタリアでつくられた最初の喜劇オペラ（*Mysteficirten*, 1787）のプランは、1790/91年冬に断念したが、その断片（*Der Cophta als Oper angelegt*）⁶は残っている。ほかに2編の『コフタの歌』（*Kophtische Lieder*）⁷が独立作品として書かれた。オペラの挫折について、ビンダーは「オペラ台本からドラマへの変更はフランス革命の間に行われ、ゲーテは今、革命の出来事とその歴史とを対照させことができることが分かったこと、革命の分析のために、オペラ台本では容量が小さすぎること、音楽の柔和な要素が場違いであることなどが考えられる」⁸と述べている。

さらに、ゲーテのカリオストロに対する関心は執拗で、イタリア滞在中の1787年4月にわざわざシチリア島へカリオストロの母を探しに出かけ、個人的にこの人物がけっして伯爵でなく、貧しい境遇から出たペテン師で、モッテ伯爵のようにロラン枢機卿を信用させたのだという確信を得たのである。ゲーテの作成したカリオストロの家系記録（*Des Joseph Balsamo, mit einigen Nachrichten von seiner in Palermo noch lebenden Familie*）が現在も残っている⁹。

さて、このドラマは1791年3月から9月の間に書かれ、12月17日にゲーテの演出でヴァイマル宮廷劇場で初演された。まだ革命の初期の段階で、比較的平穏な、革命がフランス国内に制限され、ドイツへ波及していなかった時期である。この作品は革命そのものを扱っているのではなく、革命以前の出来事を題材にしているので、厳密な意味では「革命文

学」とはいえないが、革命を引き起こした要因を問題にしているので、革命文学の1つに数えてよいだろう。

このドラマの主題は、ゲーテのカリオストロに対する大きな関心や現実に起こった「首飾り事件」の強い印象からみると、18世紀末のアンシャン・レジームの救いがたく腐敗墮落した貴族社会をイロニーシュに、批判的に描写したものといってよい。それでは、ゲーテはアンシャン・レジーム末期の世界をどのようにみたのか。作品に入って考察しよう。

まずタイトルの「大コフタ」という人物であるが、みずからしばしば偉大なコフタの使者と称して、エジプトのフリーメーソンなどを改革した、もちろん歴史的人物の詐欺師カリオストロを指すが、作品のタイトルとしては一個人を意味するというよりも、当時幾人もいた危険人物である詐欺師一般を意味する象徴的な言い方と考えられる。なぜなら、この作品の舞台は実際に「首飾り事件」の起こったフランス宮廷とは名づけておらず、ある公爵領の宮廷社会となっているからである。つまり宮廷社会を一般化しているのである。ただフランス名の使用やフランスに対する当てこすりや明らかに首飾り事件を素材にしていることからみて、フランス宮廷社会であることはまちがいないが、フランスだけに限定せずに、封建社会のドイツの宮廷社会も含めて考えてよいのである。

さらに登場人物も歴史的事件の具体的な個人名を使わず、おもに肩書き、職名を使い、一般的な呼び方がおもになっている。もちろん当時の読者・観衆にとっては、作品の「司教座教会参事会員」(Domherr)は実際の事件の「ロアン枢機卿」を、「侯爵」(Marquis)および「侯爵夫人」(Marquise)は実際の「モッテ伯爵夫妻」を、「姪」(Nichte)は実際の「若い俳優・売春婦」、「伯爵」(Graf) — ロストロ伯という場合もある — は実際の「カリオストロ伯爵」を、「君侯」(Fürst)と「プリンセス」(Prinzessin)は「フランス王と王妃」を、イロニーシュに指していることはすぐに分かったことだろう。この主要人物以外の「騎士」(Ritter)やその他の副人物は歴史的事件には登場しない、ゲーテの創作と考えられる。

このような一般化した表現は、ビンダーがいうように、「作品のなかには具体的な『首飾り事件』以上のものが問題になっている」¹⁰といっ

てよい。つまりここで、先に述べたように、ゲーテはフランス王室だけの問題でなく、当時の貴族社会一般のことを問題にしたのである。カリオストロは実際的首飾り事件と直接の関係はなかったが、ゲーテは貴族社会の腐敗堕落やこの事件の発生に、このような不可解な人物の存在や反啓蒙的、オカルト的風潮、とりわけ「イルミナーティー」のような秘密結社の存在にあると考えて、このドラマではこの人物と首飾り事件の2つを結びつけ、彼を大コフタとして主人公に仕立てあげたのであろう。このドラマでは、彼は大魔術師、奇術師、エジプトのフリーメーソンの改革者として登場する。はじめに簡単に筋書きを述べておく。

第1幕は「司教座教会参事会員」の大広間——彼は貴族かつ聖職者、すなわち第1身分なので、この身分を代表する人物と考えられる——が主催する晚餐会に、ホスト役の彼が浮かぬ顔をして、パーティーが盛り上がりぬのに、侯爵夫人は不快感を示す。彼は以前に失った、自分がぞっこん惚れ込んでいるプリンセスの好意を取り戻し、「永久に宮廷から遠ざけられた不興の思い」(12)をなくしたいと考え、その手筈を侯爵夫人に頼んでいるが、まだ実現できないので、「期待」と「不安」(10)に駆られている。侯爵夫人はそんな彼に共通の知人であるロストロ伯爵の話を持ち出す。ここから秘密結社のモチーフが出てくる。教会参事会員は彼から会合を開くのを禁じられ、「断食、引き籠り、節制、厳しい集中、教説の静かな省察」(10)を命じられているのに、パーティーを開いたことを気にしているが、侯爵夫人の方は、伯爵は「真似のできない悪漢」、「もっとも巧妙な詐欺師」(11)だと見抜き、自分は彼から瞞し方を教わっているといい、若者の情熱を利用して、信者を獲得する彼の口に感心している。つまり彼を詐欺師のお手本と思っている。そして教会参事会員に向かって、「伯爵は多くを知っているが、全知ではありません。それにこの祝宴など知るわけがありませんわ」(11)という。さらに君侯とプリンセスが夏の離宮へ赴いたときに、自分は2週間、その近くに小さな別荘を借り、あなたの用件について話をする」機会を得たという嘘の「朗報」(11)を伝え、その証拠が先ほどお渡したプリンセスからの手紙（実は自分が書いたもの）だという。彼はそれを信じて、宝物のように喜んでいる。

そこへ召使がきて、伯爵の到着を知らせる。伯爵が招霊の呪文を唱えながら登場。一同は恐れ慄く。しかし彼女は彼の言説を聞いて、ふたたび「あの人は空想家、嘘つき、ペテン師だわ。私にはそれが分かるし、確信しているわ。しかし、あの人は私に深い感銘を与えるの」(16)という。伯爵は彼の威厳のある説教や立居振舞によって、信者たちに恐れを与えている。騎士も参事会員も同様である。秘密結社のモチーフの導入によって、大コフタの不気味な存在が印象づけられる。

第2幕は侯爵の住居。首飾り詐欺事件の陰謀がはじまる。狡賢い侯爵夫人は自分と夫のために金儲けをしようと、夫に秘策を打ち明ける。「私は教会参事会員様に、プリンセスが首飾りを欲しがっていると信じさせます。嘘を言っているわけではありません。誰だって、プリンセスがそれを特にお気に召して、手に入れたがっているのを知っていますわ。さらに教会参事会員様にこういいますわ。プリンセスは首飾りを買いたがっていて、あなたからお名前だけをお借りして、宝石商と売買契約を結び、期日を定めて、たぶん最初の期日に代金を支払うことを望んでいますの」(26f.)と。そして「その宝物が手に入ったら、早速それを利用しましょう。私たちは首飾りをばらばらにしましょう。あなたはイギリスへ行って売るのです」(27)という。夫が大魔術師がそばにいて、恐くはないのかというと、同じ悪者同志だから、心配いらないと答える。

そこへ姪が登場。「容姿、体格、大きさといい」(29)、彼女はプリンセスにそっくりである。当人はまだ知らないが、夫人は彼女にプリンセスの代役をさせようと思っている。2人のいるところへ、騎士が登場。伯爵夫人と騎士の対話で、騎士もやっと「私には公爵がしばしば怪しい人物に思えることは否定しません。あるときは嘘つき、詐欺師のように思えますが、同時に彼の存在の力に呪縛され、まるで鎖に繋がれたようになるのです」(31)と、夫人とほぼ同じ見方をしている。他方、公爵は信者たちに次幕の9場に登場する大コフタの出現のための下準備をする。

第3幕は司教座教会参事会員の部屋。彼がプリンセスからの偽手紙を手にして喜んでいるところへ、宝石商が現れる。参事会員は「すでに言

ったように、首飾りは私のためでなく、ある婦人のために買うので、もちろん彼女はあなたに掛けて買うことになる」(43)という。宝石商は買手のご夫人の書いたものを見せてくれというので、見せないように止められているが、読むがよいと手紙を見せると、納得して指輪を渡す。すると、侯爵夫人からの使者が来て、「飾りが手に入ったら、すぐにこの者にお渡し下さい。……このご奉仕への報いは今晚のうちにもかなえます」(43)と書いた手紙を渡す。教会参事会員は使者に首飾りを手渡し、急ぐようにいう。

この家の一室にフリーメーソンのロッジがある。集合した参事会員、騎士、伯爵夫妻、姪、若い信者たちの前に、白いヴェークで顔を覆った、待望の、卓越した招霊師、大コフタが登場する。彼は実はロストロ伯爵自身である。ヴェールが落ちて、彼だと分かる。彼は姪に前へ進み出るようにいう。合図をすると、床から三脚が伸びて、その上に光る玉が取りつけられている。いよいよ魔術がはじまる。姪は先のヴェールで覆われ、3脚の背後に歩み、光る玉を見、一同は彼女を眺める。伯爵の何が見えるかの問いに、彼女は「明るく燃えるロウソクが豪華な部屋のなかに見え」、机のそばで「婦人が書いたり、読んだりするのが見え」、「2つの霊が椅子の後ろに見えて、交替で婦人に囁きかけている」(61)などという。彼女の言葉で、教会参事会員に、それがプリンセスであると分かり、さらに姪が「彼女は暖炉のそばに歩み寄り、鏡のなかを見ている」、「その鏡には教会参事会員様が立っています」(62f.)というので、彼は大喜びである。騎士にも「この娘がこれほど私を感動させたことはない」(62)と思われ、「なんという奇跡の力だ」(63)と、大コフタの魔術に驚く。このトリックを見ると、大コフタも、伯爵夫人の策略を知っているか、あるいは一枚噛んでいるようにみえる。

第4幕は姪の部屋。姪は侯爵夫人に命じられるままに、新しい衣装(プリンセスのものに似ている)を身につける。不安に駆られ、もともと無垢で素朴な姪は先のトリックの経験で、「教会参事会員様もとても危険だし、伯爵様は詐欺師だし、ああ、私の頼ることのできる人は騎士様だけでしょう」(64)と、心の気高い騎士にだけ心を向ける。しかし、侯爵夫人は姪に今夜の策略を指示する。「私はあなたを公園へ連れて行

き、あずま屋へ案内し、バラを渡します。しばらく待っていると、紳士が近付いて、あなたの足元に平伏して、許しを乞います。あなたは聞き取れない声で、〈あなた様〉とか、勝手なことを言います。彼は許しを乞い続けます。あなたは〈お立ちなさい〉と、小声で言います。すると、彼は和解の印として、握手を求めます。あなたは彼に手を差し出すと、彼は限りないキスをします。彼はためらいながら、席から立ち上がります。あなたは〈離れなさい〉と、急がすように言って、彼の手にバラを押しつけます。彼は引き止めようとしますが、〈誰か来ますわ〉と囁いて、あずま屋から急いで出ます。彼は別れにキスをしようとしますが、あなたはそれを押しとどめ、彼の手をおさえて、やさしく〈さようなら〉と言って、彼から離れるのです。」(67)

ところが、騎士がこっそり隠れていて、姪にプリンセスの代役をさせ、参事会員を瞞す侯爵夫人の策略を聞き出し、すぐに大臣に知らせる。

第5幕は夜の公園。伯爵も呼び出されている。「君侯と大臣の命令」(78f.)で、数人の近衛兵とその司令官、それに騎士が待機している。そこへプリンセスに扮した姪が伯爵夫妻に連れられやって来て、あつま屋で教会参事会員を待っている。この男はプリンセスに会えると思って、「私はすべての人間のなかでもっとも幸せ者だ」と「幸福の絶頂」(80)にある。侯爵夫人が彼にあずま屋を見るように促し、退場。

彼は偽のプリンセスの足元に平伏し、彼女に向かって「世界はあなたのすばらしさに満ちております。あなたの美しさ、分別、徳がすべての人間を恍惚とさせます。まるで神様のようです」(80)などと、齒の浮くような賛美の言葉を浴びせかける。彼女は「お立ちなさい」(80)というが、彼は引き留めて、しきりに許しを乞い、寵愛を求める。これに対して彼女はばれないようにほとんど口をきかない。彼女は人が来るからすぐに立ち去るようにいい、「さよなら」といって彼の手にバラを握らせる。彼は彼女の手につまみながら、一言をと頼むが、彼は彼女の手を握り返し、離れていく。伯爵夫人は姪に早く来るように促すが、しかし近衛兵がきて、居合わせた人たちを捕える。教会参事会員は「私はすべての人間のなかで最高の不幸者だ」(84)と嘆く。捕らえられはするも

の、最後は誰も厳罰に処せられることはなく、半ば宥和的な結末で終わる。歴史的イベントと同様に、ロストロ伯爵も教会参事会員も、近衛兵の司令官から許しを受け、侯爵夫妻は歴史的イベントとは異なり、終身刑に処せられず、隠し持っていた首飾りを差し出し、「静かな田舎」へ行くように指示され、放免になる。姪は自分の希望で女子修道院へ行く決心をするが、その前に騎士への愛を告白する。彼女は騎士の心を動かし、この劇の最後のセリフとして騎士は「私には善良な少女を元気づけ、彼女を自分と社会のために取り戻す願いと希望だけが残っています」(93)といい、彼女をいずれは社会復帰させ、結婚するだろうという希望を残して、この劇は喜劇に終わる。

ところで、ゲーテと秘密結社との関係であるが、ゲーテは1780年に設立されたヴァイマルのフリーメーソンのロッジ「3本のバラ」に、6月23日にまず「徒弟」(Lehrling)として受け入れられ、翌1781年の6月23日に「職人」(Geselle)に昇格し、1782年3月1日にカール・アウグスト公とともに、「親方」(Meister)となり、同年12月31日に「内部結社」(innerer Orden)の会員になった。しかし、ほとんど積極的な関与はしなかった。またヴァイスハウプト (Adam Weishaupt, 1748-1830)によって設立された「イルミナーティ」(Illuminatenorden)にも1783年2月11日に入ったが、これらの入会は政治的に危険と思われる会員を監視するのが目的で、先にあげたラーヴァーター宛書簡にもあるように、ゲーテ自身はこの種の秘密結社に最初から懐疑的だったようである¹¹。

このドラマの登場人物をみると、君侯とプリンセスは表には登場しないが、作中でもっとも身分の高い存在として置かれ、事件の解決を近衛兵に委ねている。主人公は題名からみて、大コフタ、つまりロストロ伯爵といえるが、3幕9場で描かれているように、彼は得体の知れない不気味な存在で、登場人物はすべて彼に関わっている。彼が「大」と呼ばれるのは、超人間的な存在とみられるからだが、それは彼の威厳ある振舞や魔術を行う力にある。実体は何もない、空虚なものだが、彼の周囲は荘重、華やかさ、厳粛、装飾に取り囲まれ、宗教的・偽宗教的な儀式や大仰な言葉遣いによって引き立てられている。若い信者や取り巻きはわけも分からずひたすら恐れ、拝礼し、祭り上げているが、しかし実際

は巧みな詐欺師なのである。ゲーテの捉えた当時のフリーメーソンの秘密結社の教祖の姿である。

このドラマでは「司教座教会参事会員」の個人的関心や利害をめぐって、首飾り事件が起こり、これを中心に劇が展開しているので、むしろこの人物を主人公と考えた方がよいかも知れない。彼は貴族および最高の聖職者、第1身分の代表として登場するので、ゲーテは彼を通じて、当時の権力階級を批判にしたのである。この最高の身分の支配者はプリンセスに対するエゴイスタクな情熱に支配され、ひたすら彼女の寵愛を取り戻し、宮廷における政治的権力を回復したいという名誉欲に支配された、愚かで瞞されやすい、軽薄で哀れむべき人物として描かれている。彼のよって立つ基盤はいわゆる「誕生権」である。彼は逮捕されてもなお、「私の誕生は国家における第1の奉仕の権利である。誰だつてこの利点を私から奪うことはできない」(88)とうそぶく。自分の業績ではなく、誕生に基づく身分によって特権を付与されるとすれば、自分よりも身分の高い国母のプリンセスであれば、いわば絶対的存在で、彼女に対する彼の態度はへりくだり以外の何ものでもなく、それはなによりも彼の言葉遣いによく現れている。この絶対的服従、隷属の態度は、すでに封建絶対主義の社会構造の硬直化を示している。さらにこの貴族・聖職者は、姪やはじめの騎士と同様に、伯爵の超自然的な力を容易に信じている。このような不可解な力を受け入れやすいのは、自分自身の内に自立的理性を欠き、他人に順応しやすいか、過度に神化する傾向があるからで、まことに分別を失った、愚かな人物であり、だから、侯爵夫人によって愚かだと思われ、手玉に取られるのである。

彼の考えは「すべての人間は他人からできるだけ多く取ろうとし、できるだけ少なく返そうするかを見るがよい。すべての人間は奉仕するよりも、命令することを好み、担うよりも担われることを好む。すべての人間はたっぷり尊敬と名誉を要求し、それをできるだけ遅く返す。すべての人間はエゴイストなのだ」(49)という言葉に帰着する。

一方、侯爵夫人は大コフタを詐欺師と見破り、貴族階級の見霊術に対する無抵抗、信じ安さを嘲笑するところに、かなり啓蒙化された人物と思われるが、しかし騎士との対話で「人間は白日よりも黄昏を好みま

す。黄昏に幽霊は現れます」(32) といって、これは啓蒙主義のメタファーとも考えられ、白日の啓蒙よりも、黄昏を愛する啓蒙以前の間人を利用して、この時刻を姪にプリンセスの代役をさせ、トリックで金持の司教座教会参事会委員を瞞す悪徳の人物である。彼女も最後に誕生権を主張する。近衛兵の司令官に対して、自分が悪事を働きながら、「どうか君侯のことをお考え下さい。私の血管にどんな血が流れているか、私が彼と親戚で、彼が私を侮辱すれば、ご自分の名誉を傷つけることをお考え下さい」(91) というが、司令官から「それはあなたが考えるべきでしょう」(91) とあっさり跳ねつけられる。

騎士ははじめ伯爵の魔術に引っ掛かってしまうが、結社のなかで自分の理念を実現しようとする18世紀の啓蒙化された貴族の代表者である。彼は「すべての善良な心のなかには生まれつき高貴な感情が備わっている。それは自分一人では幸せにはなれないものだ」(46) という。これはルソー、ヘルダーに代表される人間は生来善であり、かつ社会的存在であるという思想を継承する人物である。さらにキリスト教に由来する彼の結社の第1等級のモットー、「他人があなたのためになすべきだと思うことを、彼らのために行いなさい」„Was du willst, daß die Menschen für dich tun sollen, das tue für sie.“ (48) が彼の信条である。自分の利害よりも他人の利害を優先させることである。これに対して、キリスト教代表者の教会司教座参事会員は「他人があなたのためになすべきだと思うことを、彼らのために行ってはならぬ」„Was du willst, daß die Menschen für dich tun sollen, das tue für sie nicht.“ (48) と反対のことをいい、騎士に「分別ある高貴な人間がそういうことが許されますか？」と嗜められる。2人は18世紀の啓蒙的封建絶対主義社会の2つの型の間人である。しかし墮落した、古い型の貴族の司教座教会参事会員にはもう未来はない。

姪は孤児で、頼りのない境遇で、ただプリンセスに似ているということで、叔母に利用されたわけで、もともと罪のない女性である。伯爵の上手なトリックにも見事に引っ掛かってしまう弱さがあり、身内からも裏切られ、他人が信用できなくなり、修道院行きを願うことになる。しかし、騎士にだけに好意をもっている。彼はこの子を気の毒に思い、いず

れは彼女を社会復帰させ、救うという未来をみている。

しかしここに登場する人物は誰一人、カントの有名な1874年の啓蒙主義の定義、「啓蒙とは人間がみずからの責任である未成年の状態から脱却することである」¹²ということのない、啓蒙化されていない人々である。しかもこの社会には策謀、偽瞞、欲望、虚飾が渦巻いている。まさにアンシャン・レジーム末期的症状を示している。ゲーテはいわばフランスにおいて革命によってはじめて解消されるべき社会状況をこの作品で描出したのである。

しかしこの作品は酷評された。まずフランス革命に共鳴したジャコバン主義者のゲオルク・フォルスターはヤコービ宛¹³と義父のハイネ宛書間に簡単な『大コフタ』評を書いているが、後者を引用すると、この作品には「精神のきらめきも、想像力も、美的感情もない。すべてはロシアの女帝の巫術師のように平凡なものだ」¹⁴と述べ、その返信としてハイネは1792年4月12日付書簡のなかで、「『大コフタ』はその作者の名声を拡大するのにほとんど役立ちませんでした。ゲーテは大衆をととても軽蔑的に扱い、愚かさをもってからかうのがが私をしばしば立腹させました」¹⁵と述べている。

ゲーテ自身も、『フランス出征記』のなかで、「この作品はととてもすばらしく演じられたので、かえって不適切な効果を与えた。恐ろしいと同時に、悪趣味な題材が大胆に、容赦なく扱われて、すべての人を驚かせ、心に響かなかつたのである。お手本が時代に接近したものだだったので、なお一層どぎつい印象を与えたのであった。そして秘密の繋がり不都合に扱われたと思われる、観客の尊敬すべき大部分は、ちょうど女性のやさしい感情が大胆な恋の冒険家の前にびっくりするように、疎遠なものに感じられたのである。……」¹⁶と語っている。後の多くの研究家の評価も厳しく、レオ・クロイツァーは『市民将軍』、『扇動された人々』とともに、3つの革命喜劇を一括して、「ゲーテ博物館のもっとも貧弱な部類の1つ」¹⁷といい、リーゼロッテ・ブルーメンタールは「失敗作」であり、「ゲーテの詩的創作の最低の状態」¹⁸と述べ、エーミル・シュタイガーも「これらの作品には彼の天才のごくわずかな痕跡のみ見られない。フランス革命を批判的に扱った本としても、これらは重要性をもち

得ない。これら以上に、彼が自分を貶しめたものはなかったであろう」¹⁹と述べている。なるほどフランス革命という厳粛な事件の原因をテーマにする作品が軽い喜劇として書かれ、貴族とその周辺を厳しく罰するのではなく、宥和的結末に終わらせているのは、事の重大さを十分認識していないとってよいだろう。しかしながら、ディーター・ボルヒマイアーがいうように、「反啓蒙主義と、次第に単なる見せかけにすぎなくなったその価値体系の内的衰退によって、自滅しつつある貴族に対する痛烈な風刺」²⁰として読むならば、すでに革命が進行し、古い秩序が解体しつつ時点に書かれ、時宜にそぐわぬ面もあったとはいえ、革命の予兆をいち早く読み取ったゲーテの鋭い先見性をこの作品にみるのできるのである。このドラマは軽い喜劇ではあるが、フランス宮廷に対する辛辣な風刺であるとともに、ドイツ宮廷にとっては厳しい警鐘とみられるのである。

注

Text: Münchner Ausgabe. Samtliche Werke nach Epochen seines Schaffens.

Hrsg. von Karl Richter (….) 20 Bde. München, 1985ff. (MAと略記) 日本訳引用の後のカッコ内の数字はこの全集の頁数を表す。

Weimarer Ausgabe. Ab. IV: Briefe. 50 Bde. Weimar. 1667-1912. (WAと略記)

序・第1章『ヴェネチアのエピグラム』

1 MA 12, S. 308.

2 MA 3・2, S. 136ff.

3 MA 3・2, S. 94.

4 MA 3・2, S. 127.

第2章『大コフタ』

1 WA IV, 5, S. 88.

2 (Hrsg.) Alwin Binder: Johann Wolfgang Goethe, *Der Groß-Cophta*. Stuttgart. (Reclam) 1989. S.

3 MA 14, S. 14.

4 MA 14, S. 419.

5 Schröder, Winfried: Goethes *Groß-Cophta*. Cagliostro und die Vorge-schichte der französischen Revolution. In: Goethe Jb. 105 (1988), S. 182-211.

6 MA 3・1, S. 233-245.

- 7 MA 3·2, S. 9f.
- 8 Binder: a. a. O., S. 151.
- 9 MA 4·2, S. 451-468.
- 10 Binder: a. a. O., S. 152.
- 11 Vgl. Blumenthal, Lieselotte: Goethes *Großkophta*, In: WB. 7 (1961), S. 6f.
Wilson, W. Daniel: Dramen zum Thema der Französischen Revolution. In:
Goethe Handbuch. Bd. 2, Dramen. Stuttgart·Weimar (J. B. Metzler, 1996)
S. 204f.
- 12 Kant, Immanuel: Beantwortung der Frage: was ist die Aufklärung? In: (Hrsg.)
W. Weischedel: Werkausgabe XI. Frankfurt (Suhrkamp) 1977. S. 51.
- 13 Georg Forster an Friedrich Heinrich Jakobi. 6. April 1792. In: MA 4·1, S. 952.
- 14 Georg Forster an Christian Gottlob Heyne. 7. April 1792. Ibid. S. 952.
- 15 Ibid. S. 952.
- 16 MA 14, S. 511.
- 17 Kreutzer, Leo: Mein Gott Goethe. Reinbeck 1980. S. 69.
- 18 Blumenthal: a. a. O., S. 1.
- 19 Staiger, Emil: Goethe. Bd. 2. Zürich 1952. S. 92.
- 20 Borchmeyer, Dieter: Höfische Gesellschaft und Französische Revolution bei
Goethe. Adliges und bürgerliches Wertsystem im Urteil der Weimarer
Klassik. Kronberg. 1977. S. 316.

参考文献

- Binder, Alwin (Hrsg.): Goethe. *Der Groß-Cophta*. Stuttgart (Reclam) 1980.
- Blumenthal, Lieselotte: Goethes *Großkophta*, In: WB. 7 (1961), S. 1-26.
- Borchmeyer, Dieter: Höfliche Gesellschaft und französische Revolution bei
Goethe. Adliges und bürgerliches Wertsystem im Urteil der Weimarer Klassik.
Kronberg. 1977.
- Ehrlich, Lotahr: Goethes Revolutionskomedien. In: Goethe Jb. 107 (1990), S. 179-
199.
- Kreutzer, Leo: Mein Gott Goethe. Reinbeck 1980. S. 66-80.
- Müller-Seidel, Walter: Cagliostro und Vorgeschichte der deutschen Klassik. In:
ders: Die Geschichtlichkeit der deutschen Klassik. Stuttgart. 1985, S. 49-65.
- Schröder, Winfried: Goethes *Groß-Cophta*. Cagliostro und die Vorgeschichte der
französischen Revolution. In: Goethe Jb. 105 (1988), S. 182-211.

Staiger, Emil: Goethe. Bd. 2. Zürich 1952.

Mommsen, Wilhelm: Die politischen Anschauungen Goethes. Stuttgart 1948.

Wilson, W. Daniel: Dramen zum Thema der Französischen Revolution. In: Goethe Hand-Buch. Bd. 2, Dramen. Stuttgart·Weimar (J. B. Metzler, 1996) S. 204f.

Goethes Revolutionsdichtungen

Masahiro YOSHIHARA

In zahlreichen Werken Goethes von 1790 bis 1832 hat die französische Revolution ihre Spuren hinterlassen. In einem Sinne war die Auseinandersetzung mit Ursachen, Erscheinungsformen und Folgen der Revolution ein zentrales Thema seines Lebens- und Schaffens. Im allgemeinen nennt man diese Werke Goethes Revolutionsdichtung. Die ersten literarischen Äußerungen Goethes zur Revolution sind in den „*Venezianischen Epigrammen*“ (1790) zu finden. Er attackiert hier sowohl „Freiheitsapostel“, Revolutionäre als auch „die Großen“, Machthaber aus Adelskreisen. Er äußert jedoch Unmut und Ablehnung gegen die Revolution selbst, so kann man hier seine Haltung dazu durchaus ambivalent nennen.

Vier Jahre vor der Revolution schrieb er jenen hellsichtig-unheimlichen Brief an Lavater vom 22. 6. 1781, der davon spricht, daß „unsere moralische und politische Welt ...mit unterirdischen Gängen, Kellern, Gloaken miniret“ sei, so daß auch ein Einsturz der Erdboden denkbar wäre. Die Halsbandsaffäre von 1785 und die Leichtgläubigkeit des Adelskreises gegenüber der Magie und Mystifikation eines Grafen Cagliostro, der in diese Affäre verwickelt war, hat er bereits vor der Revolution als Symptom des Verfalls vom Ancien régime erfaßt, ja als Vorzeichen eines Umstuzes der ganzen politischen Ordnung erahnt.

Die 1791 entstandene Komödie „*Der Groß-Cophta*“ ist die zweite literarische Arbeit, die die Halsbandsaffäre behandelt. Die hat nicht revolutionäre Ereignisse, sondern das Ancien régime zum Thema. Die vorrevolutionäre Adelsgesellschaft Frankreichs wird hier als durch und durch verrottet dargestellt, beherrscht von Betrug, Intrige, Obskurantismus und egotischem Machtstreben. Vorliegende Arbeit behandelt die „*Venezianische Epigramme*“ und „*den Groß-Cophta*.“